シネマ女性学

恋愛の真髄かアナクロか？

松本 侑壬子・ジャーナリスト

日本ではあまりなじみがないけれど、フランスでは知らぬ者がいないほど有名だという17世紀の作家オノレ・デュルフェの古典的牧歌小説『アストレ』を88歳（2007年撮影当時）の巨匠エリック・ロメールが初めて映画化した。

紀元5世紀、ローマ帝国からは辺境の地であったガリア地方の大自然の中で展開する、羊飼いのアストレとセラドンのあまりに純粋な恋愛物語。恋に殉じて死を選ぼうとする美青年セラドンの純情は、現代にも通じるかどうか―。

原作は、17世紀パリの文学サロンの貴婦人らの間で熱狂的に愛読されたという。当時でもはるか遠い時代劇であり、しかも恋する主人公らは羊飼いという身分だが、話す言葉は美しい響きと優雅な言い回しで恋愛話術のお手本ともされたとか。フランス語に疎い者には「猫に小判」だが、実は若い現代っ子の俳優たちも、撮影前に1年間かけてこの貴婦人の言葉遣いを習得したという。

緑したたる草原。巻き毛を風になびかせながら羊を追う美青年セラドン（アンディー・ジレ）と薄いローマ風ドレスの美少女アストレ（ステファニー・クレイヤンクール）は愛を誓い合った恋人同士。だが、双方の両親が不仲なために、祭りの日にはわざと両親の前で他の女性と踊ってとアストレはセラドンに頼む。しかし、踊りの相手と木陰にいるセラドンの姿を見て、アストレは彼が本気になってしまったと思い込み、怒りに駆られて「二度と私の前に現れないで」と言い放つ。

誤解を解くことができないままに、セラドンは「彼女に会えないなら、いっそ死んでしまおう」と近くの川に身を投げる。溺れて川下の岸に打ち上げられたセラドンは、森のニンフ（精霊）たちに助けられ城に運ばれる。彼の美しさに、城のマダムはすっかり心を奪われて、目覚めた彼を城から出そうとしない。豪華な城で誘惑されても、思うはアストレのことばかり。そんなセラドンに同情した若いニンフが、こっそり女装させて城から連れ出す。が、セラドンはアストレの言葉を忠実に守り、あくまでも村には戻らず森の中で一人、暮らし始めるが…。

衣装や道具立ても、ローマ風やフランス宮廷風が混在するが、「17世紀のフランス人が5世紀のガリア地方の住人らを想像して描いた原作のスタイル」で映画も通したという。当時の読者らにとっては、そうしたアナクロニズムは一向に構わなかった。それより、この一見別世界ファンタジーの中の、恋愛におけるフィデリテ（貞節、忠誠、忠実）といった中心的主題を追求することがロメール監督の狙いだ。愛する相手の言葉を忠実に守ることと、どうしても会いたい自分自身の気持との葛藤に身を焦がし苦しむ青年の姿。これぞまさしく恋愛の真髄！今も恋の悩みは共通 ― だろうか。それとも…。

ちなみに、アストレ役のクレイヤンクールは、「（映画の恋愛は）狂信的。今の時代には存在しない」と言い、セラドン役のジレは「ゲーム感覚で演じた」と語っている。日本の若い世代にとってはどうだろう？

『我が至上の愛 ～アストレとセラドン～』

仏伊西合作映画（109分）／エリック・ロメール監督

全国ロードショー公開中

© Rezo Productions/C.E.R.